

研究

龍溪矢野文雄先生 四

位出史談会

賛助会員 山内 武 麒

改進黨の創立と報知新聞

矢野先生は、下野すると直ちに大隈に計つて「郵便報知新聞」を買収し、これを同志の根城とし、その中堅を養成する梁山泊とした。そこには藤田茂吉もいた、犬養毅も尾崎行雄も集つた。森田思軒も来た。後には箕浦藩人加藤政之助も参加した。わが國の新開界はかようにして、にわかには陸離たる光を放つことになつた。かの沼間守一を主宰とし、河津祐之、島津三郎、田口卯吉等がいた「横浜毎日新聞」とともに「報知」は、全日本に新しい氣運をかもし出す大きな原動力となつた。

この頃「報知」の社員の中に、後年政友会総裁となり、内閣総理大臣となつて「平民宰相」と名をほしいままにした原敬もいた。その当時の原は普通の雜報記者より少しましな地位に居るぐらいで、主に翻譯の仕事をして、時々論議の仕事をしていた。矢野先生が新たな社長となると、その下で藤田、尾崎、犬養毅など論議記者として控えて、原はその下廻りとして働かねばならなかつた。大正十四年に發行された「今日の新聞」の中の「報知新聞の歴史」に

「……矢野氏をはじめ藤田、箕浦、犬養、尾崎の諸

豪胆上局に譯取り、一般の論議者、外交員等以下局に扱きながら、仕事に熱中した。その頃原敬氏も報知社に居り、下局員としてマニンス新聞の翻譯に従事してゐた。此の記者達が雑誌とまゝに居るのに、原氏は、此の記者達の著物を著者がして白足袋に雪駄を一つかけ、大いに誇りして出社してゐた。ある時フランス新聞の論議者として訪して、上局のおん大藤田氏の前に斯うてくると、藤田氏はすつと目を通して、「こんどおれが居るから、原氏の眼前で折角の原稿をやりぬり」といふさいて、反古分にほうりこんだことがあつた。」と記してある。このように原は「報知」で重用されたかゝつたためか、間もなく退社してゐる。藤田茂吉はこれまで社長として社を切りまわしてゐたのだから、普通ならば社内が円満を欠ぐとみるであらうが、そこは矢野先生と藤田の仲である。藤田は新米の社長、矢野先生を表面に立てて働いたのである。

請託使官有物松下の問題が一段落すると、板垣退助を中心とする自由党が組織され、明治十四年十月二十九日東京淺草井生村樓に於いてその結党式を挙げて、「自由を拡張し、權利を保全し、幸福を増進し、社会の改良を図るべきこと」と、及び「善美なる立憲政体を確立すること」に尽力する」などの綱領を議決した。中島信行、後藤象次郎、馬場辰猪、赤松鉄腸などがその傘下に駆せ参じ、板垣を総理とした。

これと間もなく、からは新しい政黨が生まれた。それは、いうまでもなく立憲改進黨である。これは櫻井社ならびに東洋雜誌会を主としたもので、河野敏謙、前島密、北島治房、岸田元学、小野梓、成島柳北などの著名人が参加したものである。櫻井社は沼間守一、河津祐之、島田三郎、田口卯吉等を主とし、東洋雜誌会はいわゆる三

田派の青年結社で、矢野先生と曰ひぬ藤田茂吉、尾崎行雄、大齋敬、箕浦勝人、加藤政之助等が組織していたものである。いざ此劣らぬ民権論の代表的人物ばかりであった。

立憲改進黨は明治十五年(一八八二年)三月十六日東京水鏡町明治会堂で、曰ひめてその産声をあげたのである。改進黨は結党式と同時に、

- 一、王室の尊榮を保ち、人民の幸福を全うすること、
- 二、内治の改良を主とし、國權の拡張に及びすこと、
- 三、中央干渉の政略を省き、地方自治の基礎を建てること。

四、社会進歩の度に従ひ、選挙権を伸潤すること、

五、外國に對し、勉めて政略上の交渉を薄くし、通商

の關係を厚くすること。

六、貨幣の制は、硬貨の主義を持つること。

この綱領を發表し、大隈重信と總理に挙げた。そしてその機關新聞は「郵便報知新聞」、「東京横濱毎日新聞」をふまへ「朝野新聞」とした。

改進黨の綱領ならびにその言動は、自由党のそれに比べて總じて著実であつた。當時の自由党はすべてが頼る過激であると言はれてゐた。彼らはフランス議院政治に倣おうとし、急進主義を主張して議院もまた一院制を取らうとしてゐた。そのため立憲政治は賛成する人の中にも自由党に入党することをためらつてゐる人も少なくない。従つて、改進黨が出現しその綱領が公表されると、渴ける者が水を得たように、相競つてこれに馳せ参じ、見る見るうちに大政黨となつた。全国に於ける名望家、国会議員その他の有志が、潮の如く殺到した。しかして大衆の言論機關は、相率いて改進黨の声援者となつた。東京に於ても三大新聞がその機關紙である上に、「読売」

「有喜世」などの有名新聞も参加し、各地の地方新聞も相ついで呼応した。改進黨の勢力は全国津々浦々を風靡し、むしろ自由党を凌駕するようになった。

改進黨には、大隈をはじめとして当時すでに世に著聞した先輩たちがいたが、實際その第一線に立つて活躍したのは少壮の人達であつた。その少壯達は、龍溪先生を筆頭とする三田派と、沼間守一を頭分とする嚶鳴会の一派、及び小野梓が率いる鷗波会の連中であつた。

さて、自由党が産れ改進黨が現れて天下の輿論が高まると、これら反政府党に對抗して、同じ十五年三月十八日に立憲帝政黨と稱する御國黨が現れた。福地源一郎、丸山作樂、水野寅次郎等がこれを組織し、「東京日日新聞」、「明治日報」、「東洋新報」の三新聞をその機關紙として、専ら政府を庇護することに努めた。いねある民黨を敵として戦い、これらの背後には官權の保護があつた。しかし、その勢力は弱く、天下の有志者の多くはみな反政府党に属してゐたのである。

帝政黨は「憲法は欽定、主權は君主」を唱え、自由党は「憲法は民定、主權は人民」を主張した。この兩者を折衷したのが改進黨で、「憲法は欽定、主權は国会」と提唱した。また自由党はフランスの議會政治を模倣して一院制と普通選挙制をとらうとしたが、改進黨はイギリスの議會政治を範として、二院制と制限選挙制を唱道してゐた。

改進黨の機關紙であり、先生の主宰する「郵便報知新聞」はその勢は日々に増大して、矢野龍溪先生の名声はすばらしく、改進黨内に於いては常のハリゾーとして少壯論客を率いて、八面六臂の活躍をつづけてゐた。

今も自由党と改進黨とが合同するが、むしろは相協力して時の内閣に内薄したやうな、それこそ大事であ



令條項を定めて取締を厳格にする一方、一部の實業家に計つて、同年七月に官半民の新会社「共同運輸会社」を設立し、従来三菱の海上運輸保護のために支給していた、年額百三十万円の補助金を打ち切り、これをこの共同運輸に交付することにした。一方自由党及び同盟に属する諸新聞は、これに呼応して三菱攻撃の火の手をおげた。また同時に大隈排斥の声を高めた。「大隈が大蔵卿の時に、三菱社長岩崎弥太郎を助けて多くの官船を貸与し、沿海の航路を独占させ、おまじえ巨額の補助金を与えて、利益を盡しめしめていた」という意味の宣伝をなした。「大隈は官費をもつて三菱を富ませ、改進黨はそれ三菱から資金をもらつて運動費にしている」と、まことしやかに報道も非難し痛罵した。改進黨を「三菱と結託して国民民権を私にする奸党」と呼び、「海防王退治」「偽党撲滅」と騒ぎ立てた。

しかし、三菱の基礎はすでに固く、容易にこれを抜くことは出来ず、世間もまた自由党の非難攻撃が、政府の使喚によるものであると察し、改進黨も屹然としてこれらに応戦して、一步もたじろく色はなかつた。事実、改進黨は結党前にも後にも、一紙一厘の補助金三菱から受けていなかつた。全くの濡衣であつた。龍溪先生が「報知」紙上に、何の遠慮もなく公正に三菱のことを論評して憚らぬことから見てもおのずから明白である。

三菱と共同運輸とはその後火花を散らして争つた。しかし、共同運輸が如何ほど補助と官権にすがつていても、多年海運に深い経験をもつ三菱には到底敵し得なかつた。それを見た政府は遂に潮どきを見て調停を懇願することになつた。三菱の方でこんな無用な競争をつづけていると、折角發展途上にあるのが海運界を萎靡銷沈させ、外國船舶に漁夫の利を得させる結果にすることを怖れて改

府の調停に応ずることにしたので、この問題は一応落着いたのである。

経國美談を書く

在朝派と野党自由党との扱ひ擧げに對する抗争、改進黨の組織強化と党勢拡張のための全國への遊説行脚、「報知新聞」の経営等々、明治廿五、十六年は龍溪先生に於て極めて多忙な年であつた。その無理が祟つたのか、十五年の晩春と云う病に臥してしまつた。ところがこの数日の間病の床にいたことが、はしなくも先生をして一つの宿志を遂げさせる動機となつたのである。

龍溪先生はかねてから先づ何よりも人心を作興せしめなれば、憲政の確立は望みないと考へていた。「おまじえ人が生死を顧みないで水火の中へも赴くは、その人の胸中に、これが真理であり正義である」といふ強固な信念があるからである。この信念に生きて生死を眼中におかなくなつたにしろえの忠臣烈士の事蹟も言行を聴くときは難しも感奮興起せすにはいられない。近い頃は明治維新である。あの大業を見事成就させた原因は種々あるであらうが、水戸先賢の「大目撃史」、顧山陽の「日本外史」、または「太平記」などに、南朝の幾多の烈士が勤王の大義に殉じた事蹟をつぶさに叙してあり、これを己れどく人々を奮いたたせ、王政復古の機運の醸成するに大きな効果があつたことは、誰人も認めて疑ふ處とこゝろである。しかるに今、民権松張、憲政樹立の大業は、おが國初めでの事からであるので、一般の人心を奮い起こさせるような歴史も、伝記も、小説もない。由來東洋に日過去に於いてこれらの運動が一段もなかつたので、日本國民はまた立憲運動するもの志少しも知らぬ。故にこの

際どうしてか維新に於ける「日本外史」「太平記」などのような讀みものを、國民に与えて奮起させねばならぬ。それには硬いものよりむしろ「太平記」のような小説で、讀者の興味をうち引き入れることが上策であると考へて腹案を練つた。

(この項につづく)

偶感

大内勢の堅田侵攻についての一考察

佐伯史談会

会長 高木嘉吉

嘉吉元年の大内勢の堅田侵攻については、姫岳の合戦の余波として、佐伯史談八十一号に管見を述べて諸賢の批判を仰いだ。なほ大内勢が堅田に侵攻したかについては不明で、想像を記すに止めて残念に思つていた。

ところが先日、加藤会員とある事で佐伯氏の系圖を調べた。そのとき増村隆也氏の佐伯郷土史後編に記載されている佐伯氏の系圖にも目を過した。そして此代惟世の妹が大友持直に嫁していることを見出して、及左と藤をたいた。此の發見で前述の疑問が一応解決した。當時佐伯氏は日田氏田原氏と並んで、豊後に於ける強大な氏族であつたが、姫岳の戦いで持直を支持して、大内勢と戦つたことは間違いないと確信した。

かくて大内教弘の嘉吉元年に於ける九州出兵に當り、教弘は持直必ず佐伯に在らんと考へ、又姫岳の戦で大内勢を悩ました佐伯氏を撃滅せんものと、佐伯氏の本拠であつた堅田侵攻と首つたのであろう。

ここで痛感することは、佐伯氏の系圖は何度も調べて

いるのは、大事なことを見落していた筈。さてあり、一行の記録が事件解決の端緒と考へる記録の大切さである。心して郷土史探訪の旅を続けようと思ふ次第である。

(おわり)

回想

楠

市野頭 仁

私は学校まで毎朝二十分間、川辺の道を毎日歩いて通つてゐる。埴り、草色の水面から魚が突然反お上つたり、身をたして泳ぐ様を眺めたがして、楽しまながら家路に向かう。

学校と我が家の真中位の所に、大きな楠が一本、亭々と聳えている。楠は道路の真中にある、古と左に疾走する車を、見下して立っている。

ここは昔、十九浦の漁船や渡船が集まる船着場の近くで、住吉神社の境内、そして楠はその神木であつた。

家に近づくにつれて、川は溝のように濁り、臭くて魚は全く見えない。私は悲しいけれど、この道を通る。

私の通る道は、埋め立て場所が多く、太い木の根っ子が、あすこは一つ、ここは一つと、河岸であつた石垣を抱いたまま、無慈悲な姿で枯れ果ててゐる。

いざれも巨木であつた。毛利公の参觀交代の船出を見ていた、数少ない大切な樹々であつた。

それが、今ではただ一本の楠のみとなつてしまつた。

私は朝夕、自然の姿と人間の歴史について、この楠から聞かされるのである。

1 NHK「くらしのなまより」飛騨原鶴(飛騨漆)より